

群 教 セ	I01 - 01
	令3.278集
	特 - 特支

安心感・達成感を味わい、 意欲的に学習に取り組む児童の育成

—通常学級における

特別支援教育の視点を生かした授業実践を通して—

特別研修員 佐藤 愛

I 研究テーマ設定の理由

平成24年度の文部科学省による調査では、小・中学校の通常学級において、知的な遅れはないものの学習上や行動上に著しい困難を抱える児童生徒が6.5%程おり、「それらの児童生徒も含めた学級全体の指導をどのように行うのかを考えていく必要がある」という考察が示された。

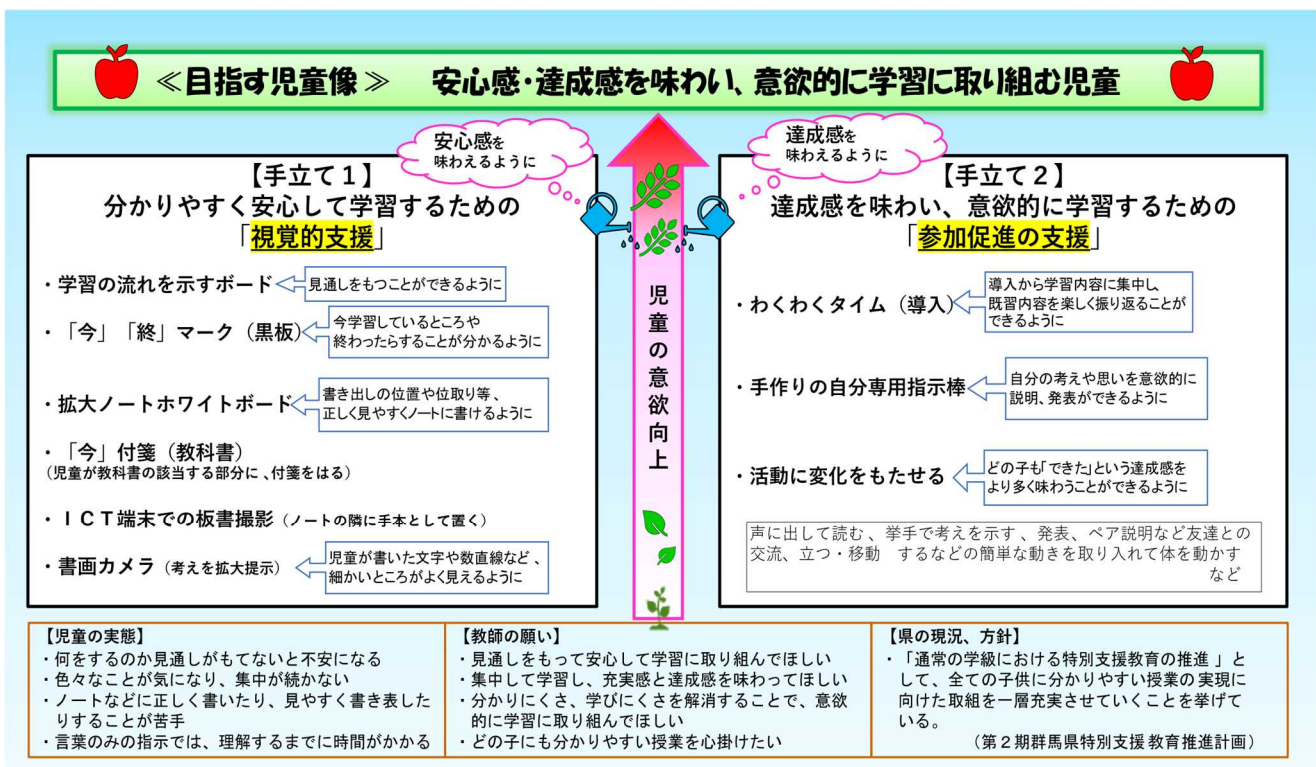
本県における「第2期群馬県特別支援教育推進計画」では、「通常の学級における特別支援教育の推進」として、ユニバーサルデザインの考え方を参考に、全ての子どもにとって分かりやすい授業の実現に向けた取組を一層充実させていくことを挙げている。

本校においても、教師の指示が通りにくい児童や学習への集中が続かない児童、学習の理解に時間がかかる児童など、学習に困難さを抱える児童が複数名在籍しており、支援の工夫が必要だと感じている。

そこで、本研究では、特別支援教育の視点から「視覚的支援」と「参加促進の支援」に焦点を当て、単元及び授業を計画・改善するための手立てとして取り入れていく。こうした取組を行うことで、どの子どもも安心感・達成感を味わい、意欲的に学習に取り組むことにつながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

「安心感・達成感を味わい、意欲的に学習に取り組む児童」という児童像を目指し、通常学級における特別支援教育の視点を生かした授業実践において、次の二つの手立てを取り入れる。

手立て1 分かりやすく安心して学習するための「視覚的支援」

- 見通しをもち、安心して学習することができるように、「学習の流れを示すボード」を用いる。
- 集中が途切れても、今学習しているところが分かるように、「今」マーク（黒板）を黒板に示しながら進める。また、児童が何をやるか分かるように、「終」マーク（黒板）を示し、活動内容や次の問題等を示すことで、見通しをもち、安心して取り組めるようにする。
- 正しく見やすくノートに書けるように、「拡大ノートホワイトボード」に同じように書く。
- 今学習しているところが分かるように、児童が教科書の該当部分に「今」付箋を貼る。
- 必要に応じて、ICT 端末で板書撮影して個別提示したり、書画カメラで拡大提示したりする。

手立て2 達成感を味わい、意欲的に学習するための「参加促進の支援」

- 気持ちを切り替え、既習内容を楽しく振り返ることができるよう、導入に「わくわくタイム」を取り入れる。（フラッシュカードやミニプリント、各教科に応じたアクティビティなど。）
- 意欲的に説明、発表し、達成感を味わえるように、「手作りの自分専用の指示棒」を用いる。
- 達成感をより多く味わうことができるよう、声に出して読む、挙手、発表、ペア説明、簡単な動きを取り入れて体を動かすなど、様々な活動を一授業に取り入れ、活動に変化をもたせる。

このように、二つの手立てを取り入れた授業実践を通して、分かりにくさや学びにくさを解消し、意欲的に学習に取り組むことができるようになる。また、これらの手立ては、様々な教科に取り入れることができ、全ての児童にとって分かりやすい授業の実現、学習活動の充実につながる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 学習に見通しがもてず、「次は何をしますか」と教師に問い掛けたり、本時の学習内容を授業前に質問したりしていた児童も、「学習の流れを示すボード」を掲示したことで、学習の流れを把握し、落ち着いて取り組むことができた。「ボードがあると分かりやすい」という意見が多かった。
- 「今」マークに注目し、今やるべきことを確認しながら、集中して学習することができた。気になる児童が「今どこをやっているか分かるから勉強しやすい」とアンケートに答えていた。
- 「終」マークは、算数の練習問題に取り組む際などに活用したが、終わったら何をやるのかを教師に尋ねることが減り、見通しをもち、集中して課題と向き合うことができるようになった。
- ノートと同じマス目の「拡大ノートホワイトボード」を用いることで、書き出しの位置や間隔をよく見て、正しく書くことができた。社会で矢印を用いた図を書く際にも、有効だった。
- 「わくわくタイム」を楽しみにしている児童が多く、全児童が「わくわくタイムがあるとよい」と答えていた。授業の導入に取り入れることで、学習に向かう意欲を高めることができた。
- 自分で作った「指示棒」を用いることで、積極的に説明する姿が多く見られた。
- 活動に変化をもたせた展開としたことで、「できた」という思いを多く味わうことができた。

2 課題

- 算数を中心に授業実践を行ってきたが、実態を基にした手立てを工夫することで、どの教科にも意欲的に取り組むことができるようになることを考える。
- どの子にも分かりやすい支援を心掛けるとともに、できるようになったら支援を減らすことも大切である。下位児童への支援を充実するとともに、ノートのまとめ方の工夫など、上位児童への支援も工夫するなど、一人一人の児童の実態に合わせた支援を探っていく必要がある。
- 参加促進の支援を取り入れた授業を行ってきたが、今後は、児童同士の関わり合いや話し合いを充実させ、さらに達成感を味わい、意欲的に学習することができるようにしていく必要がある。

実践例

1 単元名 「小数」 (第3学年・2学期)

2 本単元について

本単元は、学習指導要領の「A数と計算」「(5)小数の意味と表し方」を受けたものである。本単元は、四つの小単元から成り立ち、単元の目標は、「小数の構成や順序、系列、大小について理解するとともに、加法及び減法の計算の仕方を整数の計算の仕方を基に考え、計算することができる」である。安心感・達成感を味わい、意欲的に学習に取り組みながら、本単元に関わる資質・能力を身に付けさせたいと考えた。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	小数とその表し方に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア (知識及び技能) ・小数の意味や表し方、構成、順序、系列、大小について理解し、小数を用いて端数部分の大きさを表すこと。 ・小数第一位までの小数の加法及び減法の計算をすること。 イ (思考力、判断力、表現力等) ・端数部分の大きさを表すとき、十進法取り記数法や等分したいくつ分の考えを基に新たな単位 (0.1) をつくり、そのいくつかで表すなど、拡張して考えること。 ・小数を多面的に捉え、それを生かして加法及び減法の計算の仕方を考え、説明すること。 ウ (学びに向かう力、人間性等) ・小数を用いると、整数で表せない端数部分の大きさを表すことができるなどのよさに気づき、生活や学習に生かそうとすること。	
評価規準	(1) 小数の意味や表し方、構成、順序、系列、大小について知り、小数を用いて端数部分の大きさを表すことができる。また、小数第一位までの小数の加法及び減法の計算をすることができる。 (知識・技能) (2) 既習事項を基に新たな単位 (0.1) をつくり、そのいくつかとするなど、端数部分の表し方を考えることができる。また、小数を多面的に捉え、それを生かして加法及び減法の計算の仕方を考え、説明することができる。 (思考・判断・表現) (3) 小数を用いると、整数で表せない端数部分の大きさを表すことができるなどのよさに気づき、生活や学習に生かそうとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
てあ	第1時 第2時	・小数が使われている場面について話し合い、新しい数に対する興味・関心を高める。 ・長さについて、複名数で表される数量を、小数を用いて、単名数で表すことができることを理解する。端数部分の大きさの表し方を考え、小数の表し方と読み方を理解する。
進究する	第3時 第4時 第5時 第6時 第7・8時 第9時 第10時 第11時	・小数の位取りの仕組みや数の構成を理解する。小数の数直線上の表し方について理解する。 ・小数を、数の構成を基に、0.1を単位として相対的にみて表す。 ・小数と整数、小数と小数の大小比較の仕方を理解する。 ・一つの数を多面的にみて表す。 ・小数第一位までの小数の加法の計算の意味や原理、方法を理解し、計算する。 ・小数第一位までの小数の加法の計算原理や方法、筆算の仕方を理解し、計算する。 ・小数第一位までの小数の減法の計算の意味や原理、方法を理解し、計算する。 ・小数第一位までの小数の減法の筆算の仕方を理解し、計算する。
つかり	第12時	・基本的な学習内容を理解しているか確認し、それに習熟する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全12時間計画の第6時に当たる。本時の学習活動は、一つの数を多面的にみて表すことであり、3.9の表し方について考える。その際、言葉や数直線、式などを用いて表したり、説明したりする活動を行うため、目で見てよく分かるような視覚的支援や、意欲的に取り組めるような支援をすることが大切である。そこで、次の二つの手立てを具体化した。

手立て1 分かりやすく安心して学習するための「視覚的支援」

- 授業の始めや授業中に、本時の学習の流れが分かり、見通しをもって安心して学習できるように、「学習の流れを示すボード」を黒板横の棚に掲示し、流れを示す。
- 今学習しているところを視覚的に捉えられるように、復習、本時のめあて、学習内容、まとめと、板書に沿って「今」マークを移動したり、教科書に「今」付箋を貼ったりする。
- 見通しをもち、安心して取り組んだり、次の取組内容を捉えたりすることができるよう、「終」マークをミニホワイトボードに掲示し、問題を解き終えたらすることを書き示す。
- 一マスに一つの数字を書くことや小数点の位置などに気を付け、正しく見やすいノートとなるよう、児童がノートに書く内容は、「拡大ノートホワイトボード」に同じように書く。また、ICT端末で板書を撮影して、個別に提示したり、書画カメラで拡大提示したりする。

手立て2 達成感を味わい、意欲的に学習するための「参加促進の支援」

- 休み時間から気持ちを素早く切り替えることができるよう、授業の導入に「わくわくタイム」を取り入れる。本単元では、既習内容を楽しく振り返ることができるよう、小数ペーパーじゃんけんを行う。
- ペア説明や全体共有の際には、意欲的に説明、発表し、達成感を味わえるよう、「手作りの自分専用指示棒」を用いて、式や数直線を指し示しながら、自分の考えを伝える。
- 集中することが苦手な児童も参加し、「できた」を多く味わえるよう、様々な活動を一授業に取り入れ、活動に変化をもたせる。問題やめあて、まとめを声に出して読み、内容を捉えたり、挙手で自分の考えを表したり、わくわくタイムやペア説明などで交流したりする。

4 授業の実際

「言葉や数直線、式などを用いて表したり、説明したりする活動を通して、一つの小数を多様な見方で表すことができるようにする」ことをねらいとして授業を行った。

(1) 分かりやすく安心して学習するための「視覚的支援」について

黒板横の棚に「学習の流れを示すボード」を掲示し、終わった内容も消さずに残し、全内容が分かるようにした。流れが目で見えて分かるので、授業途中にも確認し、見通しをもち取り組もうとする姿が見られた(図1)。

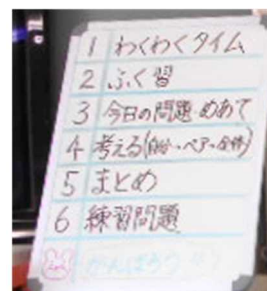


図1 「本時の流れを示すボード」

今学習しているところを示す「今」マークについては、復習、本時のめあて、学習内容、まとめと、板書に沿ってマークを移動させながら授業を行った。集中が途切れてしまったときに、今何を学習しているのかがすぐに分かるように、黄色い丸で示して目立たせた。「今、ここだよ」「移動するよ」と声を掛けることで、児童の意識がより黒板の方に向かった(図2)。「今」付箋については、本時は活用しなかったが、教科書を使用する際には、付箋を移動する姿が見られている。

また、終わったら何をしたらよいかを示す「終」マークをミニホワイトボードに貼るとともに、次の取組内容を書き、掲示した。「終わりました」「終わったら、何をしたらいいですか」などの声が減り、目で見えて確認し、次の学習へ移ることができていた。まだ練習問題を解いている児童も、終わった児童の様子を気にし過ぎず、やるべきことに集中することができていた(図2)。

さらに、板書とノートの整合性を意識し、「拡大ノートホワイトボード」を用いた。拡大機で模造紙サイズにプリントし、透明のフィルムを貼り付けて作った。ノートと同じマス目のものを用いて書くことで、書き出しの位置や間隔が分かり、児童が正しく見やすいノート作りができるようになってきた。「何マス空ける」「真ん中の三角矢印のところ」など、書く場所を言葉で伝え、本時の学習では、マス目の数や小数点の位置に気を付けて、正しく書く姿が見られた(図2)。

他に、書き出しの位置や位取り等、正しく見やすくノートへ書くことができない児童には、必要に応じて、ICT 端末で板書を撮影して、個別に提示する予定だったが、本時の学習では、「拡大ノートホワイトボード」をよく見て書けていたため、使用しなかった。また、全体共有の場面では、書画カメラを用いて、児童の考えが書かれた表し方カードを拡大提示することで、児童全員に伝えたい部分がよく分かるようにした。

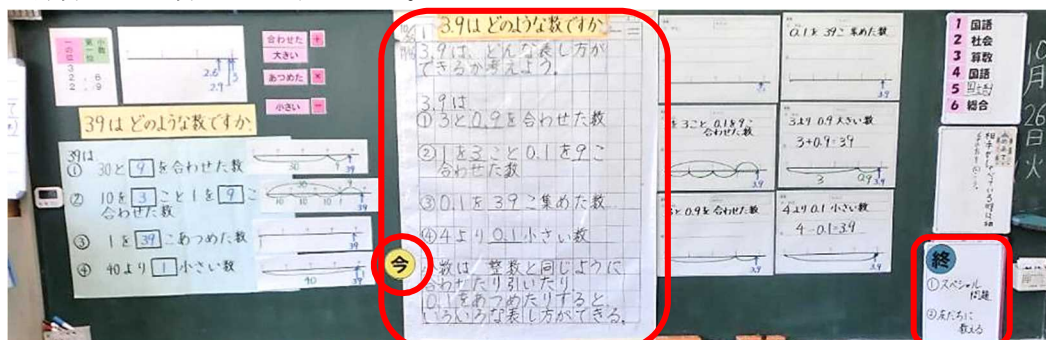


図2 「今」マーク、「終」マーク、「拡大ノートホワイトボード」

(2) 達成感を味わい、意欲的に学習するための「参加促進の支援」について

休み時間から気持ちを切り替えることと、既習内容を楽しく振り返ることをねらいとして、導入に「わくわくタイム」を取り入れた。本時の学習内容に合わせて、「小数ペーパーじゃんけん」を行い、笑顔で楽しむ姿が見られた。黄緑色の付箋をメロンジュースに見立て、付箋1枚を0.1L、10枚貼って1Lをスタートとし、じゃんけんでは勝てば0.1Lもらえるという方法で行った。活動に変化をもたせることを意識し、いろいろな人と交流する時間にした。じゃんけんという単純な活動である分、全ての児童にとって分かりやすく、1Lから増えたり減ったりすることを楽しみ、「もっとやりたい」という声も聞かれた。0.1のいくつ分という考えを想起し、既習内容を楽しく振り返ることができていた(図3)。



図3 「わくわくタイム」

また、ペアで説明し合う際、「手作りの自分専用の指示棒」を用いた。自分で指示棒を作ったことで、「指示棒を使いたい」「発表したい」という気持ちにつながった児童が多かった。説明する側は、数直線や式を指しながら説明し、聞く側も、相手が指しているところに注目して聞いていた。自分の伝えたい部分を指し示すことで、相手の児童により考えが伝わりやすくなり、聞く側の児童も相手の説明をよく聞こうとする姿が見られ、達成感につながった(図4)。



図4 手作りの自分専用の「指示棒」を用いたペア説明の様子

さらに、集中することが苦手な児童も参加し、達成感を味わえるように、様々な活動を一授業に取り入れた。本時の学習では、問題やめあて、まとめを声に出して読んで内容を捉える、挙手で自分の考えを表す、わくわくタイムやペア説明といった活動で、友達と交流することなど、声に出したり、体を動かしたりしながら、活動に変化をもたせ、参加を促した。

5 考察

通常学級における特別支援教育の視点を生かした授業実践において、二つの手立てを取り入れて行ってきた。児童の実態に応じた支援のため、活用しなかったものはあるが、「安心感・達成感を味わい、意欲的に学習に取り組む児童」という児童像を目指す上で、手立てが有効であったと考えられる。

手立て1の「視覚的支援」については、落ち着いて学習する姿や、集中して課題と向き合う姿、正しく見やすくノートに書く姿が多く見られるようになった。アンケートでも、「学習の流れを示すボード」と「拡大ノートホワイトボード」に関しては、全児童が分かりやすいと答えている。「次に何をやるのが分かってよい」「どこに何を書くのが分かる」「間違えたらすぐに気付く」というアンケート結果からも、有効な手立てであったと考える。算数を中心に行ってきたが、「学習の流れを示すボード」は、音楽や体育などの実技教科でも活用でき、見通しをもち、安心して取り組むことができると感じた。また、「拡大ノートホワイトボード」は、社会で図を書く際にも有効だったため、より充実した学習活動を目指し、各教科や児童の実態に応じて支援を修正し、活用していく必要があると感じた。

手立て2の「参加促進の支援」については、全児童が「わくわくタイムがあるとよい」と答えており、笑顔が多く見られた。「楽しいことを一回やったら、もっとがんばろうと思う」「考えることができるとよい」というアンケート結果からも、児童の意欲を高める手立てとして、有効であったと考える。また、「手作りの自分専用の指示棒」を用いて説明することは、達成感や意欲だけでなく、分かりやすさにもつながり、理解も深まると考えられる。しかし、指示棒を用いることや、活動に変化をもたせるだけでは、参加促進の支援としては不十分だと感じた。児童同士の関わり合いや話し合いを充実させることで、互いに認め合い、達成感を味わい、意欲的に学習することができるのではないかと考える。

最後に、通常学級において、特別支援教育の視点を生かした授業実践を行うことは、どの子も安心感・達成感を味わい、意欲的に学習に取り組むことにつながると感じた。今後も、全ての児童にとって分かりやすい支援とともに、支援の必要性を見極めて修正を重ねること、上位児童への支援も充実することなどを心掛け、児童の実態に合わせた支援内容を探っていきたい。